

壺井 栄の肖像 児童文学をめぐって

宮 澤 健太郎

はじめに

日本の敗戦後、戦争の悲しみとその結果のむごさを全国民に知らしめ、さらに全国民を泣かせた、小説『二十四の瞳』で有名な壺井栄の児童文学について、またその小説とそれ以外の作品でみせる性格の違いの本質についてを明らかにしようとするのが本稿の目的である。

壺井 栄とは

一八九九（明治32）八月五日香川県小豆郡坂手村甲四一六（現内海町坂手）に父、岩井藤吉、母アサの五女として生まれた。父の職業は樽職人、母は10人の実子のほか孤児を預かって育てた。納入先の醤油会社の倒産を受けて家運が傾いたが、栄は教員をめざして内海高等小学校に入り卒業。回漕業の手伝いの後、村の郵便局で働いた。文学を好み、後に役場で働くことになる。その頃兵役免除で島に戻った黒島伝治との交流の結果、同郷の壺井繁治と連絡を取

り合い上京、結婚。住居を構えた世田谷太子堂の長屋には林芙美子、平林たい子らのアナキストを夫にもつ作家たちが住んでいた。栄も次第に左翼系芸術連盟の賄いをするようになった。夫が刑務所に入っている間は戦旗社の社員として働いた。佐多稲子や宮本百合子との知遇を得たのもこのころだ。昭和10年頃から作品『月給日』、『大根の葉』を発表、作家の道に入った。児童文学は昭和20年の敗戦以後になるが、27年の『二十四の瞳』（「ニューエイジ」）は戦争反対のメッセージが多くの人々を掴み木下恵介監督により映画化された。昭和36年10月軽井沢で急性喘息の発作を起し以後入退院を繰り返し一九六七年（同42年）六月二三日発作のため亡くなった。

壺井栄の『岸うつ波』（「婦人公論」昭和28・4―12）という小説は主人公、なぎさ、のある意味、女の一生を、さらには女の苦悩が描かれた作品だが、なぎさが初恋の相手の戦死を受けてやむなく嫁いだ東京の社会主義者、小説家の永井の嫁にたいする非人間的な扱いと、そこで起こった様々な不条理の結果、その家を追い出された事情は読者の大きな同情をよんだ。一方では、そのモデルとされた社会主義小説家、徳永直からの反論作『草いきれ』（「群像」昭和31・8―9）が発表され、別に「群像」誌上で壺井との論争となった。つまり、この作品『岸うつ波』ではなぎさの側からの怨念が丹念に描きこまれ、永井の悪さがいかにも浮立っていたからこの部分の永井の造型は成功しているということだ。実際にはこれは、徳永直の二番目の妻、山口カネとの再婚（昭和23年4月）、昭和26年5月離婚した事実をネタにした事件であったようだ。一般小説で壺井が丹念にかきこむことの特異さを發揮した一作であった。

児童文学への出発

壺井 栄は小説から出発したわけだが、37歳のとき、つまり一九三六年（昭和11）の秋にちかくに住んでいた佐多稲子にすすめられて初めて坪田譲治の『風の中の子供』を読んだのが児童文学の出発点であった。坪田譲治は生活童話という、いわゆるおとなの社会生活の中の子ども像を描いた事で名を売っていた作家だ。それに触発されて『大根の葉』や『まつりご』を書いたのがその端緒だった。児童ものと大人ものの区別については、彼女自身が「児童文学入門」（牧書店、昭和32年9月）の中で『わたしの童話はどうして生まれたか』で次の様に書いている。

童話を、文学一般の中の特異なものとして考えていないわたしは、いわゆる童話というものをひとつもかいていません。もちろんこれは、わたしひとりの考え方であって、純童話というものがあり、専門の童話作家がたくさんいることはいうまでもないことです。しかし、わたしのばあいは、いわゆる童話というものはひとつもないと思うのです。（中略）

わたしが童話をかきだしたのは、小説のほうとほとんど同時だということが出来ます。『まつりご』という作品は、そういう童話の処女作ということが出来ます。わたしはこの『まつりご』を童話集の中にも、短篇小説集の中にも加えています。小説集では、本の題名にまでなっているくらいですから、そのことでも、わたしの童話にたいする私自身の考え方はわかっていただけたかと思えます。（略）『まつりご』『十五夜の月』『柿の木のある家』など、わたしの初期の作品がほとんどすべて懐古的であるのは、そのころ四十に近かったわたしの、それまでの年月にたまっていた過去の思い出のしづくのたまったものであった、ということが出来ます。

そこに出てくるものは、わたしの少女時代にわたしが経験したり、わたしの先祖や兄弟たちの歩いてきた道程でのできごとばかりだったと思います。そのすぎ去った過去が、どうしてわたしに制作への感動をよびおこしたのか。たとえば『まつりご』についていいますと、これはこじきのみなしご兄弟が、人に追われながら神社の堂や、浜にあげてある船の中で寝起きしながらすごしているのを、若い職人の一家にひろわれる話なのですが、これはわたしが生まれない前の、じっさいにあった話なのです。職人というのがわたしの父であり、こじきだった子どもは、わたしの心のついたころにはもう一家をかまえ、父の職業をついでいました。

つまり坪田譲治の作品と同じく生活の中の子どもの日常をありのままに懐古的に描いているのである。栄が求めたかったのはその日常のなかでの「感動」や「愛情」であり、大人とか子どもとの境を取り去った人間としてのあるがままの感情だった様に思われる。さらには作品の中の親と子との綿密な愛情、土着の質素な思いが基調低音となつてひびきわたっている。例えば童話『まつりご』（『同盟通信』昭和15）では荒神さまのところで見つけた孤児2人をひきとって職人にしてあげる、というほのぼのとした実家の懐古話であり、童話『餓鬼の飯』（『少女の友』昭和16・5）では、楽しみにしていた友人同士の子どもの食事作りを予定していたのが、病気で来られなくなった主人公の友人、初代のためにお友達が食事をつくってもっていつてあげるやさしさが話のテーマである。

童話『おるすばん』（『少女の友』昭和18・6）は、おじいちゃん子の和子が、おじいちゃんのはなしを楽しみにしている幼い頃の郷愁がテーマの作品。同じ郷愁が土台となる童話『峠の一本松』（『少年倶楽部』昭和20・11、12）は

村の象徴であった峠の一本松は二百十日の嵐で倒れるが、戦争に行っていた少年の父がたまたま、少年が二百十日の日にその松の木まで迎えにいった丁度そのとき帰って来た、といううれしい奇蹟でおわっている。戦後に初めて書かれたこれも戦争に対する恨みを表す反戦作品といつてよいだろう。

童話『柿の木のある家』（昭和19年・6）は家の裏にある大きな柿の木にはおじいさん自慢のうまい柿の実がなっていた。フミエや洋一それに三太郎伯父さんをまじえた人々の交流のなかで、柿の木を通しての自然の豊かさが暖かく描かれる。これは第一回児童文学受賞作品でもあった。

童話『あんずの花のさくころ』（『少国民世界』昭和22・8）は遠い田舎のおばあちゃんの所からみかんを送ってもらっても、郵便荷物の事情が今と違って悪いので着いた頃には、腐ってしまった。ここでは手紙によっても心の通い合いができるとした懐古の作品である。童話『孤児ミギー』（『PTA』昭和23・5―24・2）では名前が、右文（＝みぎふみ、略してミギー）という戦災孤児を通して、天衣無法な当時の子どもの生き様がかたられている。この作品によって作者は母性を直覚し、しかもその子の成長によってまわりも成長した、という確信を得たともいっている（前述文献）。

童話『坂道』（『少年少女』昭和26・6）では、下宿を引っ越しをして行く慣れ親しんだ堂本青年の正義感が読者の感動をよんだ作品である。

『二十四の瞳』こころ

学校小説『二十四の瞳』は昭和27年2月から11月にかけて家庭雑誌「ニュー・エイジ」に発表された。これは作者

によれば壺井栄の実家、岩井の家で育った12名の家族の話を書こうと思ったそうだが、出版事情の都合で分教場の教室で教えた同じ年の子ども12名の戦争の前と後との歳月の流れのなかでの戦争の悲惨さを訴えた物語に変わった物語だ。

瀬戸内海に面した岬の突端の分教場に赴任してきた若い大石先生は初めから自転車にのって登校して村人を驚かせた。先生の担当した1年生12人の瞳をみてこの子らの目を濁すまいと決心する。しかし赴任そうそうこどもたちのいたずらで掘った落とし穴に落ちて、足の骨の骨折事件を起し一旦学校を休むことになる。このような事件を経験しながら先生と子どもたちは心をつなげてゆく。その後、先生は結婚のため教場をさり、一方日華事変や太平洋戦争が起こり、太平洋戦争に負けて、先生も人の親と成って、再び教場にかえってくる。そこで戦争にいったまま帰らない子どもたちの存在を知りかつ驚き、人生の落差に涙を流すのであった。

大人も子どももなく、同じ重さで読者の涙腺をくすぐる戦争というものの理不尽さを訴えたのは、それなりに重い問題を提起していた。

おわりに

しかし、一般的にいえば、『二十四の瞳』は壺井栄のもつ生活と心理を描くという重い描写に至っていない感じを強くうけるのは何故だろうか。それは時系列的な物語進行が特に後半は、あっさりし過ぎていて、それぞれの登場人物の内面描写が薄くなっているのに原因があるのであろう。いわゆる栄の作品構成には主人公の心の描写が重いのが常だが、この作品ではこの部分がうすいことによるのだろう。それは戦争による欠落の方が大きかった為であらうか。

従って本人が同じだと云うが、実際の所、栄の児童文学と一般小説での読者に与える印象はあきらかに違って見える。端的に言ってしまうえば、その原因は、この作者における、児童文学への懐古性（とくに生活偏重の懐古性）がこの作者に特に強く出過ぎているためではなからうか。この作者独特の丹念な怨念（心の描写）が欠落したのがその一番の原因だといっても過言ではないように思われる。